

第一問

問一

形ある風景も、そこを生きた人々が記憶や内面に刻み、意味を問い続けることがないかぎり、時の経過とともに姿を消して忘れ去られるということ。

問二

人為を超える天災が繰り返し襲来し、川が急流をなす島国という風土のなかで養われた、時間がとどまることなく流れ去るという感覚のもとで、自然をあるがままに受け容れ、その生々流転の相に美を見出すような捉え方。

問三

「文化的な時間」とは、生活する土地の自然条件に合わせて人々が人為的に築いて来た歴史の産物としての時間であり、「地球の時間」とは、人間の生の営みを超越して、物理的な変動をとめないながら地球誕生以来営まれて来た自然の時間である。

問四

過酷な自然と渡り合って人間の生を直視することで造形された作品には、流れ去る時間とは異質な人間の生の記憶が重層的にとどめられているということ。

問五

現代社会の忙しなく流れ去る効率主義的な時間に追われる人々が、孤立や不安を強いられる日常を離れて、他者と出会い、悠久の人類の営みやそこに与る自身の生の意義を省みながら、芸術の創造の生命の豊かさを玩味して心穏やかに緩やかな時に満たされた場所。

第一問

問一 a 異口 b 思索 c 唱

問二 ア 間接的 イ 初めから(最初から)

問三 言葉

問四

人間は、思想や観念を学んだり教示されたりすることによって、絶望したり生の喜びを抱いたりするわけではないのに、思想や観念に導かれて、絶望や生の喜びがもたらされると錯誤するということ。

問五

豊かな心を育もうとする教育はあるが、知的な観念による表層的な技術にとどまるかぎり、現実的な有効性を持ちえないと消極的な評価を下している。

問六

物事の価値を自分なりに判断する際の基準は、現実の社会生活において経験を積むなかで、自己の存在意義を見出す過程を通じて形作られるということ。

問七

思想や観念は、そもそも人間の死や生を捉えきれず、時代や文化ごとに多様であり、現実との関係も確認できないため、知的な理解の対象となりえても、現実の諸問題を解決しうる力とはなりえないから。

第二問 (A)

問一

- ㉑ 知りたさで
- ㉒ 年長の
- ㉓ 各々の身分に応じて
- ㉔ 世間に認めさせよう

問二

- ㉕ 必ずしも悲観なさるべきだとも思われません。
- ㉖ 実に容易に就ける受領にさえも就いていらつしやらないのだよ。
- ㉗ 私為朝の計画し申しあげることに従いなさるのがよい。
- ㉘ お前たちは、若いので、どのようにでも行動してください。
- ㉙ どれほどの栄達を期待できようか、いや、できない。

問三

運に恵まれ順調な時もあれば、不運な時もあるということ。

問四

- (ア) 義朝のもとに投降しようということ。
- (イ) 義朝が自らの戦功に代えて父親である自分の助命を必ず取り計らってくれるはずだと期待し、また自分がまず生きながらえることで息子たちの命を助ける展望も開けると考えたから。

問五

「八郎は思いがけない為義の投降の意志に衝撃を受けて、言葉も出ない様子であったが、「その外の子供」はまず何よりも父が助かることを優先するべきだとその意見に賛同した。

問六

自分の命が助かるのかどうかさえわからないが、お前たちの命を助けることができるかどうかを試してみるつもりだよ。

問七

ともに行動すれば一度に敵に捕らえられ、皆が殺されてしまうだろうが、別行動を取ったならばたとえ何人かは命を落としても、生き残った者が再び栄達する可能性もあると考えたから。

問八

まだ年も幼く、武具の扱いすらおぼつかないような未熟な状態。

第二問 (B)

問一

国家が安らかに治まるようになるためには、賢明な人材を登用する必要があり、報徳彝なら賢明な人物を推挙できると思ったから。

問二

報徳彝の知る限りでは、太宗に推挙する価値のある優れた人材がないから。

問三

宜しく朕が憂勞を分かつべし。

問四

昔の名君は賢明な人材を別の時代から探し求めたりはせず、すべてその当時の時代から登用した。

問五

優れた人材は何時の時代にもいるはずなのに、それをみつけられないのは報徳彝自身が探す努力を怠っているからだ。太宗に指摘され、臣下として申し訳ないと思っただから。